祭りや伝統行事等の地域活動への参加がもたらす個人の幸福度への影響に関する一考察

A Study of Impacts of Participation in Community Activities such as Festivals and Traditional Events on Individual Wellbeing

上野　美咲
Misaki Ueno

1. はじめに

日本国内におけるエリアマネジメント活動として「まちなみや景観の向上を目的とした活動」「防災・防犯・安全への取り組みを重視した活動」等が注目されている。なかでも「祭り」「イベント」等を含む「にぎわいや集客へ効果のある活動」については，地方等の小さな規模の地域でも十分成功する可能性のあることが示されている（上野，2018b）。近年では，地方においても複数の都市が共同で運営し，延べ100日間を通して行われる瀬戸内国際芸術祭のような比較的規模の大きなイベントも存在する。また，賀茂祭（以下，葵祭），祇園祭，時代祭といった京都三大祭りに関しては，京都の伝統行事であり，京都の文化として捉えられ，地域住民の協力によって長年にわたり継続されている祭りもある。上記で取り上げた取り組みは，いずれも国内外から多くの来訪者を誇り，観光面においても期待されるものである。一方で，日本国内ではこれまでも地方各地に存在する神社を中心とした祭り等，上記と比較すると規模が小さく，地域に根差した祭りも多く実施されてきた。その多くは五穀豊穣や無病息災等を祈願するものである。また，エリアマネジメント活動のような地域活動においては地域内の信頼や互恵性といったソーシャル・キャピタルが重要であり，そのソーシャル・キャピタルを高める存在として寺社の存在や祭り等が重要な役割を果たすとされている（伊多波ほか，2009）。しかしながら，近隣住民との繋がりが希薄化し，個人の時代といわれる現代において，住民が地域活動へ参加することのインセンティブを如何にしてもうけるかといった観点も検討課題として挙げられる。

そこで本論文では，ソーシャル・キャピタルを高めるとされる祭りや伝統行事に参加することが，個人の幸福度にどの程度関係しているのか等について分析を行う。本論文の構成は以下の通りである。まず，ソーシャル･キャピタル理論と既存の研究について考察する。次に，ソーシャル・キャピタルの観点で国内外の祭りや伝統行事の事例を考察する。さらに，収集した日本国内のデータを用いて，順序ロジットモデルによる分析を行う。

2. ソーシャル・キャピタル理論と地域活動

2.1　ソーシャル・キャピタル理論に関連した既存研究

ソーシャル・キャピタルの主な構成要素として「信頼」「ネットワーク」「互酬性の規範」が挙げられるが，主に本項では，このようなソーシャル・キャピタルの主な構成要素と地域活動等の関係について見ていきたい。

いわゆる一定エリア内での活動を示唆するエリアマネジメント等の地域活動では，Harbaugh et al.（2005）と上野（2018b）は「信頼」と地域活動（エリアマネジメント活動等）の関係が非常に強いことを指摘している。日本国内の地域活動においては「信頼」が有効である一方で，一定エリア内での活動もしくは一定エリア外での活動のいずれかによって，「信頼」の種類や度合いが異なることが示されている（上野，2019）。

また，無形文化資本やソーシャル・キャピタルの総合醸成器・インキュベーターにしても，都市・地域の発展において祭りが重要な役割を果たすことは認識されつつあると見られる（田村ほか，2015）。先述したように，上野（2018b）は，祭り等の「にぎわいや集客へ効果のある活動」に関しては，地方等の小さな規模の地域でも十分成功する可能性のあることを示している。伊多波ほか（2009）によると，祭りをソーシャル・キャピタルとして捉えた場合，積極的に祭りへ一定エリア内の住民だけでなく一定エリア外の人々を巻き込むことによって，祭りの評価を引き上げることが可能となり，祭りを中心とする様々なビジネスの機会が生まれることを示している。さらに，伊多波ほか（2009）は，祭りを通じたソーシャル・キャピタルの醸成により，人々の行動規範が経済的要因のみならず，文化的要因等にも影響されることとなり，非経済的なインセンティブの重要性が相対的に高まってくると指摘する。一方で，長期的な視点では経済的便益を地域社会に対してもたらす可能性があるという。

伊藤ほか（2016）が指摘するように，寺社の存在はソーシャル・キャピタルの一つの要素である互恵性を高める効果がある。つまり，葵祭のように，毎年5月15日に賀茂神社にて斎行される祭りは，祭りと神社の両方におけるソーシャル・キャピタルの相乗効果が期待される。

一方で，田村（2015）によると，伝統的な祭りは基本的に宗教団体等を中心に運営されていたが，従来では「政教分離」のもとで，公共性の高い祭りに対する公的支援が多くなっている。つまり，伝統的な祭りは必ずしも特定の宗教団体を中心として行われるのではなく，地域を構成する一般的な地域活動の一つとしても捉えることができる。一例としては，八坂神社の祭礼である祇園祭については，現在は山鉾町が主催する装飾品等の披露等で有名となっている。

続いては，ソーシャル・キャピタルを「橋渡し型」と「結束型」に分類して，国内外の伝統行事等との関連性に関する事例を見ていきたい。

2.2　ソーシャル・キャピタルの観点からみた国内外の祭りや伝統行事の事例[1)]

ソーシャル・キャピタルの観点における伝統行事等の地域活動の重要性を理解するために国内外の事例を紹介したい。

伊多波ほか（2009）では，ソーシャル・キャピタルを「橋渡し型」と「結束型」に分類しているが，氏神神社を中心として行われる祭りはコミュニティの結束を高めるために実施されることが多く,「結束型」として解釈できる。先述した賀茂神社はこれに該当する。一般的に,「結束型」は内向き志向でかつ，等質的な集団を強化していく志向にあり，特定の互酬性を安定させる働きがあるとされる（伊多波ほか，2009）。一方で，京都三大祭りの一つである葵祭に関しては，規模が大きく，国外からの来訪者が増え，観光資源としての祭礼にもなっており,「橋渡し型」のソーシャル･キャピタルの特徴である開放性といった要素を強くもつため, むしろ「橋渡し型」のソーシャル・キャピタルを醸成しているといえる。つまり，賀茂神社の祭礼として行われる葵祭については,「結束型」と「橋渡し型」の両者の特徴を有するため, 先述したような祭りと神社の両方におけるソーシャル・キャピタルの醸成という意味合いでの相乗効果を発揮していると考えられる。

また，大阪三大祭の一つであり，例年 1 月 9 日～ 11 日に行われる今宮戎神社（氏子を持たない崇敬神社）の例大祭である十日戎に関しては, 3 日間で延べ 100 万人以上の来訪者[2)]を有しており，上記の葵祭と同様に「橋渡し型」として分類できる[3)]。なお，地域住民（約 80 名× 3 日間），講組織及び各崇敬団体のような地域住民以外（約 80 名× 3 日間），学生アルバイト（約 50 名× 3 日間），関西大学及び立命館大学の外国人留学生を含む福娘（50 名× 3 日間），えびす娘（30 名× 3 日間），福娘 OG 会組織であるいまみや福娘会（30 名× 3 日間）等の協力によって運営されている。上記以外にも，祭礼中，今宮戎神社周辺の道路上には多数の露店が出店される。

上記の二つの事例については，いずれも日本国内における神社を中心とした祭り等の伝統行事であるが，これ以降は国外の地方都市で開催されるスポーツに関する伝統行事について検討する。

全英オープン等と同様にメジャー選手権の一つとして有名なマスターズ・トーナメントについては, 米国ジョージア州オーガスタで毎年開催される[4)]。メジャー選手権の中でも毎年同じ場所で開催されるのはマスターズ・トーナメントのみである。「ゴルフの祭典」マスターズ・トーナメントを主催するオーガスタ・ナショナル・ゴルフクラブはジョージア州アトランタ市生ま

1)　本項の日本国内の事例については，主に葵祭行列保存会，賀茂別雷神社（上賀茂神社），賀茂御祖神社（下鴨神社），今宮戎神社の関係者等への聞き取り調査をもとに構成している。

2)　十日戎の来訪者数及び協力者数については，新型コロナウィルス感染症の影響を受ける以前の直近の延べ人数を記載している。

3)　本段落は，大阪府市町村振興協会おおさか市町村職員研修研究センター（2022）参照。

4)　本段落は，大阪府市町村振興協会おおさか市町村職員研修研究センター（2022）参照。

れの通称ボビー・ジョーンズが中心となって1932年に開業した名門ゴルフクラブである。他の名門ゴルフクラブの例にもれず，閉鎖的なゴルフクラブであり，以前は女性会員を認めていなかった。このような特徴から「結束型」のソーシャル・キャピタルの典型例と捉えることができる一方で，マスターズ・トーナメントの開催期間中は，周辺の学校が休みになり，学生ボランティアの受け入れや地域住民が来訪者等に自宅を貸し出す等，地域の伝統行事として地域住民の協力によって成り立っている背景がある[5)]。マスターズ・トーナメントといえばテーマソングや優勝者に授与されるグリーンジャケットが有名であるが，メジャー選手権の中でも観戦という意味で突出して聖地化されているといっても過言ではなく，来訪者と地域住民の交流の機会とも捉えられるため，「橋渡し型」のソーシャル・キャピタルの側面もある。

また，英国ウインザー城の近くに位置するアスコット競馬場で英国王室が主催する競馬として有名な通称ロイヤルアスコットについては，開催期間中は延べ約30万人（5日間）の来訪者があり，厳格なドレスコードが設けられる[6)]。近年では，国内外の観光客を含む来訪者にとって非日常体験ができる場所として，また，社交の場としての意味合いも強い傾向にある。特に女性の間では，競馬観戦に加えて，ファッションを通じた社交の場として人気を博しており，近年における位置づけとしては「橋渡し型」のソーシャル・キャピタルとして分類できる。

このように，ソーシャル・キャピタルの観点でみた際に，国内外の伝統行事等への参加に関しては，運営側の協力者と来訪者という両方の立場でみてとれる。「結束型」として特徴づけられる一定エリア内のソーシャル・キャピタルの醸成のみならず，運営方法によっては，外向き志向の「橋渡し型」として特徴づけられる一定エリア外からの来訪者に対するソーシャル・キャピタルの醸成も行われるといえる。

3. 仮説の設定

これまでの議論で述べたように，伝統行事等の地域活動については，様々な観点からソーシャル・キャピタルの醸成が行われることが明らかとなっている。一方で，個人の時代といわれる現代において，住民が地域活動へ参加することのインセンティブを如何にしてもうけるかといった観点について検討する必要がある。そこで，本節では，伊藤ほか（2016）が指摘しているように，ソーシャル・キャピタルが高いと幸福度が高まるという点を踏まえ，以下の仮説を提示したい。なお，浦野（2003）によれば，阪神淡路大震災の事例をもとに，災害直後よりも長期にわたる復旧・復興過程における方が，地域活動のような組織的な取り組みは様々な効用をもたらすという。そこで，東日本大震災直後のデータと比較することで統計的な有意性を確認したい。

5） https://news.golfdigest.co.jp/news/pga/article/119747/1/ 参照。
6） https://www.ascot.com/horse-races-and-events/royal-ascot/overview 参照。

仮説：ソーシャル・キャピタルを高めるとされる祭りや伝統行事等の地域活動に参加することで，個人の幸福度が高まる。

4. 分析手法

4.1　順序ロジットモデル

本項では，本分析の統計手法を紹介する。ここでの分類は，現在の幸福度を「とても不幸」から「とても幸せ」まで 11 段階（1 点刻み）の幸福度合いの分布を検討する。この場合，幸福度合いに関してはある程度の「順序」が存在する。これらの分類が従属変数である場合は，順序ロジットモデルを使用できる。

順序ロジットモデルは，順序のある 3 つ以上の選択肢を同じ説明変数で説明したい場合に使用することが可能である。仮に順序のある選択肢が M 個あるとする。また，観測されない潜在変数 Z_i は次のように決定されるものとする。

$$Y^* = \sum_{k=1}^{K} \beta_k X_k + \varepsilon = Z_i + \varepsilon$$

X_k = 説明変数群

β_k = 説明変数 X のそれぞれの係数

K = 説明変数の数

ε = 誤差項

なお，ここで Z_i は

$$Z_i = \sum_{k=1}^{K} \beta_k X_k = E(Y_i^*)$$

とする。

ここで，X_k は観測可能な変数（説明変数）で，潜在変数 Z_i の変動を説明する ε は観測されない変数で X_k で説明される部分以外を表したものである。個人 i について観察される従属変数 Y_i は未知のしきい値 μ_1，μ_2，μ_3，$\cdots$ μ_{M-1} に対して，

$Y_i = 1 \quad Y_i^* \leq \mu_1$

$Y_i = 2 \quad \mu_1 < Y_i^* \leq \mu_2$

$Y_i = 3 \quad \mu_2 < Y_i^* \leq \mu_3$

:

$Y_i = 11 \quad Y_i^* > \mu_{10}$

によって定義されるものとする。推定では係数 β_k としきい値 μ_1 を同時に推計する。ε は分布関数である。

なお，ここで Y_i は順序が存在する 11 種類の選択肢とする。

その結果，それぞれの Y がその値によって入る領域は以下となり，

$$P(Y=1) = \frac{1}{1+\exp(Z-\mu_1)}$$

$$P(Y=2) = \frac{1}{1+\exp(Z-\mu_2)} - \frac{1}{1+\exp(Z-\mu_1)}$$

$$P(Y=3) = \frac{1}{1+\exp(Z-\mu_3)} - \frac{1}{1+\exp(Z-\mu_2)}$$

:

$$P(Y=11) = 1 - \frac{1}{1+\exp(Z-\mu_{10})}$$

が導かれる。β は通常の重回帰の係数とほぼ同じように解釈できる。すなわち，β の符号がプラスであれば X_k が大きいほど従属変数 Y_i は大きな値となる（確率が高くなる）。β の符号がマイナスであれば X_k が大きいほど従属変数 Y_i は小さな値となる（確率が低くなる）。

4.2 被説明変数と説明変数

上記と同様，被説明変数（従属変数）である「配列の効果」に関しては，5 年前及び現在の幸福度を「とても不幸」から「とても幸せ」まで 11 段階（1 点刻み）の幸福度合いに分類される。このような幸福度合いが祭りや伝統行事等の地域活動への参加の影響をどの程度受けているかについて検証する。経年変化を踏まえた上で仮説検証するために，5 年前（2011 年 3 月に発生した東日本大震災直後）及び現在の幸福度を被説明変数とした。説明変数は個人の属性及び多様な地域活動に関する項目等である。詳細は以下の通りである。

被説明変数

5 年前の幸福度：「とても不幸」＝ 1 ～「とても幸せ」＝ 11（1 点刻み）

現在の幸福度：「とても不幸」＝ 1 ～「とても幸せ」＝ 11（1 点刻み）

説明変数

人口：大都市＝1～町村＝4（大都市（東京23区，政令指定都市），中都市（人口10万人以上の都市），その他の都市（人口10万人未満の都市），町・村）

年齢：高齢者＝1～若者＝63（1936年（昭和11年）以前～1998年（平成10年）以降，1年刻み）

性別：男性＝1，女性＝0

文化センター，公園，広場などの公共施設に関する地域活動ダミー：はい＝1，いいえ＝0

治安，にぎわい，景観など，まちや地域の暮らしやすさに関する地域活動ダミー：はい＝1，いいえ＝0

祭りや伝統行事などの文化的なものに関する地域活動ダミー：はい＝1，いいえ＝0

その他の地域活動ダミー：はい＝1，いいえ＝0

子供の頃，親や祖父母が地域活動に参加する際に一緒に参加して育った：全くあてはまらない＝1～よくあてはまる＝5

子供の頃，親や祖父母が地域活動に参加しているのを見て育った：全くあてはまらない＝1～よくあてはまる＝5

子供の頃，親や祖父母が人を助けるのをみて育った：全くあてはまらない＝1～よくあてはまる＝5

子供の頃，家庭内で人助けの大切さを学ぶ機会があった：全くあてはまらない＝1～よくあてはまる＝5

子供の頃，家庭内で地域活動に参加することの大切さを学ぶ機会があった：全くあてはまらない＝1～よくあてはまる＝5

世帯年収ダミー（以下のカテゴリーにあてはまる場合には1，それ以外は0）：

400万円未満

600万円以上1,000万円未満

1,000万円以上

世帯金融資産ダミー（以下のカテゴリーにあてはまる場合には1，それ以外は0）：

400万円未満

600万円以上1,000万円未満

1,000万円以上

4.3　データ

本調査は2017年3月1日から10日までインターネット（NTTコム オンライン・マーケティング・ソリューション株式会社に実施を委託）を通して行い11,371名から回答を得た[7]。上記回答者全体の地域分布は「大都市（東京23区，政令指定都市）」が36.7%，「中都市（人口10万人以上の都市）」が23%，「その他の都市（人口10万人未満の都市）」が31.9%，「町・村」が8.4%となっている。本調査には，性別，年齢，教育，仕事，収入等の基本的な個人属性に関する質問が含まれ，また多様な地域活動に関する回答者の意見や態度に関するいくつかの質問も含まれている。

5. 結果

記述統計については図表1を参照されたい。「人口」については小規模都市が多いような分布

図表1　記述統計

	平均値	最大値	最小値	標準偏差	歪度	尖度	標本数
人口	2.251	4.000	1.000	0.999	0.083	1.803	5422
年齢	26.473	63.000	1.000	13.911	0.295	2.095	5422
性別	0.666	1.000	0.000	0.472	−0.705	1.497	5422
公共施設の維持活動ダミー	0.373	1.000	0.000	0.484	0.523	1.274	5422
景観等の維持活動ダミー	0.463	1.000	0.000	0.499	0.147	1.022	5422
祭りや伝統行事等の地域活動ダミー	0.510	1.000	0.000	0.500	−0.038	1.001	5422
その他の地域活動ダミー	0.071	1.000	0.000	0.256	3.352	12.233	5422
親や祖父母と一緒に地域活動に参加して育つ	3.125	5.000	1.000	1.070	−0.299	2.323	5422
親や祖父母の地域活動を身近で見て育つ	3.235	5.000	1.000	1.072	−0.401	2.441	5422
親や祖父母の人助けを身近で見て育つ	3.209	5.000	1.000	1.006	−0.309	2.628	5422
家庭内で人助けの大切さを学ぶ	3.164	5.000	1.000	0.982	−0.270	2.707	5422
家庭内で地域活動に参加することの大切さを学ぶ	3.101	5.000	1.000	0.978	−0.239	2.690	5422
世帯年収ダミー							
400万円未満	0.368	1.000	0.000	0.482	0.546	1.298	5422
600万円以上1,000万円未満	0.280	1.000	0.000	0.449	0.981	1.963	5422
1,000万円以上	0.101	1.000	0.000	0.301	2.647	8.007	5422
世帯金融資産ダミー							
400万円未満	0.366	1.000	0.000	0.482	0.555	1.308	5422
600万円以上1,000万円未満	0.172	1.000	0.000	0.377	1.741	4.031	5422
1,000万円以上	0.335	1.000	0.000	0.472	0.701	1.492	5422

7）　本調査は，科学技術振興機構社会技術研究開発センター（JST-RISTEX）「ソーシャル・キャピタルの世代間継承メカニズムの検討」プロジェクト等の調査の一環として実施した。なお，京都大学経済研究所先端政策分析研究センター「エビデンス・ベース社会の構築に向けた人文社会科学の学際融合事業」との連携によって行われた。

となっている。「年齢」は高齢層が多く，「性別」はやや男性が多いサンプルとなっている。現在の地域活動については,「祭りや伝統行事などの文化的なものに関する地域活動」のみ平均値がやや高い値となっている。子供の頃の地域活動等の経験については5段階のうち，いずれも3以上と高い値となっている。年収や資産に関する平均値についてはいずれも低い値となっている。

順序ロジットモデルを使用して得られた実証検証の結果を以下に示す。

図表2　推定結果（個人の幸福度への影響に関する分析）

	Y1=5年前の幸福度			Y2= 現在の幸福度		
	係数	z−値		係数	z−値	
人口	−0.038	−1.550		−0.037	−1.522	
年齢	−0.027	−13.428	***	−0.025	−12.591	***
性別	−0.279	−5.118	***	−0.319	−5.893	***
公共施設の維持活動ダミー	0.191	3.647	***	0.179	3.415	***
景観等の維持活動ダミー	0.071	1.363		0.106	2.043	**
祭りや伝統行事等の地域活動ダミー	0.241	4.639	***	0.247	4.744	***
その他の地域活動ダミー	0.428	4.254	***	0.366	3.620	***
親や祖父母と一緒に地域活動に参加して育つ	0.020	0.511		0.096	2.531	**
親や祖父母の地域活動を身近で見て育つ	0.029	0.719		0.006	0.147	
親や祖父母の人助けを身近で見て育つ	0.034	0.793		0.061	1.428	
家庭内で人助けの大切さを学ぶ	0.114	2.437	**	0.152	3.287	***
家庭内で地域活動に参加することの大切さを学ぶ	0.045	0.953		−0.052	−1.113	
世帯年収ダミー						
400万円未満	−0.269	−4.176	***	−0.306	−4.752	***
600万円以上1,000万円未満	−0.001	−0.011		0.014	0.211	
1,000万円以上	0.248	2.704	***	0.207	2.267	**
世帯金融資産ダミー						
400万円未満	−0.045	−0.575		−0.062	−0.794	
600万円以上1,000万円未満	0.184	2.069	**	0.153	1.734	*
1,000万円以上	0.494	6.014	***	0.462	5.667	***

有意水準：***=1%，**=5%，*=10%
対数尤度：Y1=−10946.61，Y2=−11011.01
統計量：Y1=0.027，Y2=0.026

5.1　現在及び5年前の幸福度に関する考察

まずは，5年前の幸福度（Y1）について見ていきたい。

「人口」については，統計的に有意でなかった。人口の大小による幸福度への影響はないものと考えられる。「年齢」「性別」については，統計的に有意（1%）であり，符号はマイナスであった。高齢者や女性ほど幸福度が高い傾向にあることを示している。現在の地域活動に関しては,「治安，にぎわい，景観など，まちや地域の暮らしやすさに関する地域活動」は統計的に

有意ではなかったが,「文化センター，公園，広場などの公共施設に関する地域活動」,「祭りや伝統行事などの文化的なものに関する地域活動」,「その他の地域活動」については，いずれも統計的に有意（1%）であり，符号はプラスであった。一方で，子供の頃の経験は「家庭内で人助けの大切さを学ぶ機会があった」に関しては，統計的に有意（5%）であり，符号はプラスであった。それ以外の子供の頃の経験は統計的に有意ではなかった。世帯年収については「400万円未満」は統計的に有意（1%）であり，符号はマイナスであった。「600万円以上1,000万円未満」は統計的に有意ではなかった。一方で,「1,000万円以上」は統計的に有意（1%）であり，符号はプラスであった。つまり，世帯年収が高い方が幸福度は高い傾向にあるといえる。世帯金融資産については「600万円以上1,000万円未満」（有意水準5%),「1,000万円以上」（有意水準1%）であり，符号はプラスであった。世帯金融資産が多いと幸福度が高い傾向にあるといえる。

続いて，現在の幸福度（Y2）について見ていきたい。

属性要因である「人口」については，統計的に有意でなかった。「年齢」「性別」については，統計的に有意（1%）であり，符号はマイナスであった。高齢者や女性ほど幸福度が高い傾向にあることを示している。上記の属性要因については，5年前の幸福度（Y1）と同様の傾向にあることがわかった。現在の地域活動に関しては，いずれも統計的に有意であり，符号はプラスであった。地域活動への参加は幸福度を高める傾向にあるものと考えられる。一方で，子供の頃の経験は，「親や祖父母が地域活動に参加する際に一緒に参加して育った」（有意水準5%),「家庭内で人助けの大切さを学ぶ機会があった」（有意水準1%）に関しては，統計的に有意であり，符号はプラスであった。それ以外の子供の頃の経験は統計的に有意ではなかった。世帯年収については「400万円未満」は統計的に有意（1%）であり，符号はマイナスであった。「600万円以上1,000万円未満」は統計的に有意ではなかった。一方で,「1,000万円以上」は統計的に有意（5%）であり，符号はプラスであった。つまり，世帯年収が高い方が幸福度は高い傾向にあるといえる。また，世帯年収が高い場合にも幸福度が高い傾向にあるといえる。世帯金融資産については「600万円以上1,000万円未満」（有意水準10%),「1,000万円以上」（有意水準1%）であり，符号はプラスであった。世帯金融資産が多いと幸福度が高い傾向にあるといえる。

改めて5年前と現在の幸福度を比較してみると,「治安，にぎわい，景観など，まちや地域の暮らしやすさに関する地域活動」,「子供の頃，親や祖父母が地域活動に参加する際に一緒に参加して育った」に関しては，5年前の幸福度への影響として有意ではなかったが，現在の幸福度へはプラスに有意であることがわかった。その他の項目については，5年前と現在ではほぼ同様の結果となっている。子供の頃の地域活動の実体験やまちや地域の暮らしやすさに関する地域活動については，年々幸福度へプラスの影響を与える傾向にあるといえる。なお，日本は規律を守る風習にあるが，一般的に震災等の災害時には,「治安」面が悪くなる傾向にあることも上記結果と整合性がとれるものであろう。

5.2　仮説に関する考察

上記の結果を踏まえて仮説について検証したい。本仮説の中心である「祭りや伝統行事などの文化的なものに関する地域活動」を取り上げると，現在及び5年前のいずれの場合でも係数の符号はプラスで統計的に有意（1%）であることがわかった。この結果は，祭りや伝統行事などの文化的なものに関する地域活動に参加することが，個人の幸福度を高める傾向にあることを示している。つまり，仮説が支持されるものと考えられる。

6. 結論

本論文では，ソーシャル・キャピタルを高めるとされる祭りや伝統行事に参加することが，個人の幸福度にどの程度関係しているのか等について分析を行った。

以前より，欧米諸国を中心として，エリアマネジメントといった公益性を備えた地域づくりに関する活動数が増加傾向にある。日本国内においては，自治体の財政悪化を背景とした公的施設の運営等に多くの問題を抱えている。このような状況下において，官民連携で行うエリアマネジメント活動のような地域活動への期待は高い傾向にある。特に主体となる地域住民等の民の果たす役割は非常に大きいといえる。また，地方においては，地域に点在している文化財や寺社等の活用を視野に入れた観光型エリアマネジメントのような取り組みが注目度を増している。一方で，主体となる地域住民同士のつながりについては希薄化している現状は否めない。このような現状を踏まえると，ソーシャル・キャピタルの醸成を図る寺社や神社等を中心とした祭りや伝統行事の活用は益々期待されるところである。

本論文の全体的な考察を以下に述べる。まず，ソーシャル・キャピタルの様々な観点から国内外の伝統行事等の事例をみてきたが，神社を中心として，地域住民のみならず，エリア外からの観光客等の来訪者を多く招く祭りや伝統行事がソーシャル・キャピタルの醸成を図る上でも非常に大きな役割を果たしているといえる。一方で，特定の宗教団体に限らず，スポーツイベント等の伝統行事の実施についても上記と同様の効果をもつことが期待できる。全国調査の結果では，ソーシャル・キャピタルを高めるとされる祭りや伝統行事に参加することが，個人の幸福度を高めるということが実証されたことにより，上記の地域活動を通して個人へのインセンティブをもうけることが可能といえる。また，広場などの公共施設に関する地域活動についても幸福度へプラスの影響を与えることを考えると，マスターズ等の事例のように公共施設を活用したスポーツに関するイベント等を積極的に実施することも有効である。

また，人口要因は幸福度への影響に対して有意ではないという結果から，大都市と地方都市との間で幸福度へ与える影響の差異はないことが示された。冒頭でも述べたように，「祭り」「イベント」等を含む「にぎわいや集客へ効果のある活動」については，地方等の小さな規模の地域でも十分成功する可能性のあることが示されていることも踏まえて（上野，2018b），今後は，大都市，地方都市に限らず，エリア内外のソーシャル・キャピタルの醸成を図るためにも観光

戦略を意識した伝統行事等の企画を多く実施する必要があるといえる。さらに,「治安，にぎわい，景観など，まちや地域の暮らしやすさに関する地域活動」については，直近の結果では幸福度への影響がプラスに有意であることから,「祭り」等のにぎわいを備えた地域活動は，生活に根差した形で今後取り組むことも有効であろう。また近年は，子供の頃の地域活動の実体験が幸福度へプラスの影響を与えていることも踏まえ，日常の中で伝統行事への参加を促すことが期待される。

さらに，インセンティブの形成に着目した今後の課題としては，今回実施した伝統行事等の地域活動への参加がもたらす個人の幸福度への影響のみならず，その他のインセンティブの要因を検討する余地がある。例えば，無病息災を祈願するような伝統行事を検討する際に役立つ個人の健康度への影響等について検証することも可能である。

参考文献

伊多波良雄・八木匡（2009）「ソーシャル・キャピタルとしての祭り～京都三大祭りの経済的評価を中心に～」Doshisha University Life Risk Research Center Discussion Paper Series No.2009-02。

伊藤高弘・窪田康平・大竹文雄（2017）「寺院・地蔵・神社の社会・経済的帰結：プログレスレポート」『行動経済学』9 巻，行動経済学会，pp.102-105。

稲葉陽二・吉野諒三（2016）『ソーシャル・キャピタルの世界～学術的有効性・政策的含意と統計・解析手法の検証～』ミネルヴァ書房。

上野美咲（2018a）「都市デザイン」，中西のりこ・仁科恭徳編著『グローバル・コミュニケーション学入門』三省堂，pp.42-53。

上野美咲（2018b）『地方版エリアマネジメント』日本経済評論社。

上野美咲（2019）「ソーシャル・キャピタルが地域活動に及ぼす影響に関する一考察」『経済理論』399 号，和歌山大学経済学会，pp.53-66。

浦野正樹（2003）「第 3 章阪神・淡路大震災と地域社会の対応」『平成 12 年度～13 年度科学研究費補助金［基盤研究（C）（2）］研究成果報告書「地域における安全志向型コミュニティ活動の可能性と地域文化の変容に関する研究」』，pp.3.1-3.13。

大阪府市町村振興協会おおさか市町村職員研修研究センター（2022）「ヒトとカネからみる大阪版 BID の導入可能性」『令和 3 年度「住み続けたいまちづくり研究会」報告書』，pp.7-9。

小林重敬・森記念財団編著（2018）『まちの価値を高めるエリアマネジメント』学芸出版社。

田村一軌・韓成一・戴二彪（2015）「都市振興と祭り：北九州市の「わっしょい百万夏まつり」を事例に」『東アジアへの視点』26 巻 1 号，アジア成長研究所，pp.37-46。

坪郷實編著（2015）『ソーシャル・キャピタル』ミネルヴァ書房。

宮川公男・大守隆編（2004）『ソーシャル・キャピタル―現代経済社会のガバナンスの基礎』東

洋経済新報社。

GDO ニュース編集部「地域密着の「マスターズ」11 月開催でオーガスタ周辺の学校は秋休みに？」2020 年 4 月 16 日 12 時 5 分掲載分（https://news.golfdigest.co.jp/news/pga/article/119747/1/　閲覧日：2021 年 3 月 15 日）。

Harbaugh, T. W., Krause, K., Liday JR, S G., and Vesterlund, L. (2005). Trust in Children: Trust & Reciprocity, Ostrom, E., and Walker, J. (ed.), Russell Sage Foundation, New York, pp.302-322.

Helliwell, J. F. (2003). How's life? Combining individual and national variables to explain subjective well-being. Economic Modelling, 20, 2, pp.331-360.

Knack, S. and Keefer, P. (1997). Does social capital have an economic payoff? A cross-country investigation. The Quarterly Journal of Economics, 112, 4, pp.1251-1288.

McFadden, D. (1974). Conditional Logit Analysis of Qualitative Choice Behavior. In: Frontiers in Econometrics, Zarembka, P. (ed.), Walthamacademic Press.

McKelvey, R.D. and Zavoina, W. (1975). A Statistical Model for the Analysis of Ordinal Level Dependent Variables, Journal of Mathematical Sociology, 4, pp.103-120.

Ostrom, E. (2000). Social capital: A fad or a fundamental concept in: Social capital: A multifaceted perspective, Dasgupta, P., and Serageldin, I. (ed.). World Bank Publications, Washington, D.C., pp.195-98.

Ostrom, E. and Ahn, T. K. (2009). The meaning of social capital and its link to collective action: Handbook of social capital: The troika of sociology, political science and economics, Svendsen, G. T., and Svendsen, G. L. H. (ed.). Edward Elgar Publishing, Cheltenham, pp.17-35.

Taniguchi, H. (2013). The Influence of Generalized Trust on Volunteering in Japan. Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly, 42, 1, pp.127-147.

Theil, H. A. (1969). Multinomial Extension of the Linear Logit Model, International Economic Review, X, pp.251-259.

Royal Ascot（https://www.ascot.com/horse-races-and-events/royal-ascot/overview 閲覧日：2021 年 3 月 15 日）。